

日本人留学経験者の就活体験レポート

—真の国際人を目指して—

Job Hunting Report by a Japanese Student Studied

Abroad:

To Become a Real Internationally-minded Person

創価大学経営学部経営学科 田中 美帆

TANAKA Miho

(Undergraduate Student, Faculty of Business Administration, Soka University)

キーワード：海外留学、就活、留学体験

はじめに

私の通う大学には、「人間教育の最高学府たれ」「新しき大文化建設の揺籃たれ」「人類の平和を守るフォートレス（要塞）たれ」という3つの建学の精神があります。そして、学内は建学の精神を具現化するために、智慧、勇気、慈悲の3つを有した地球市民を育成しようとの気概が教授陣や学生にも漲っています。実際に、中堅大学でありながら、交流校は世界48カ国・地域、150大学(2014年8月現在)のネットワークを持ち、海外への留学者数の全学生に占める割合も約10%と決して低くはありません。受け入れる外国人留学生の国籍も多様で、キャンパス内での日常的な国際交流が盛んです。昨今海外短期留学を必修化しようという大学も現れて来ておりますが、学生の多くは自らの強い意志により、「自己特化型」の留学を創造し、自分の人生を切り拓く一つ的手段として、世界に羽ばたいていることを多くの先輩や同期の友人を通して実感しております。そして、私も昨年の2月より本年1月までの1年間、中国・清華大学へ交換留学生として派遣して頂くチャンスを得て、多くのことを学ばせて頂きました。

交換留学決定までの道程

私の父は台湾人、母は日本人です。そのため、私は3歳から小学校4年生までの7年間を台湾の現

地私立幼稚園、小学校で学びました。当時の友人とはFacebookを通じて今でも交流がありますが、多くの友人が国立台湾大学を始めとする有名大学へ進学しており、今年の「ひまわり学生運動」と称された学生による国会占拠に参加した友人も少なくありませんでした。もし、私が日本へ帰国していなかったら、彼等と行動を共にしていたのかも知れないと思うと、とても他人事とは思えず、Facebookを通じて彼らの安否を気遣いました。

今では、「第二の故郷」である台湾が大好きだと公言できますが、当時小学校4年生だった私には、日本とは比較にならない程厳しい台湾での教育制度そのものが灰色にしか見えず、より豊かな中学校生活を送りたいとの強い念願のもと、日本の私立中学校受験を決意しました。そして、現地校から台北日本人小学校5年に編入するために、2か月半という超短期間で母語を北京語から日本語へ切り換えました。母と二人で小学校1年生から4年生までの教科書を一緒に勉強し、日本人学校編入後は進学塾での猛特訓を受けて受験に臨んだのです。結局第一志望校は不合格だったため、第二志望校に入学しましたが満足できず、中学3年の1学期を終えた段階で区立中学へ転学し、中学受験では不合格だった第一志望校の高校受験のリベンジを図り、漸く念願の充実した楽しい高校生活をスタートさせることができたのです。

そして、大学入学後は、2010年にスタートしたGlobal Citizenship Program (以下GCP)の2期生として睡眠時間を惜しんで、勉学に励みました。GCPは、地球市民の育成を目指した全学部横断型プログラムで、選抜された30名の学生で構成されています。英語や数理能力、課題発見・解決能力等を養成する科目を始め、世界水準の教養を目指す土台作りとして、最初の2年間で集中的にどの分野にも共通する学問の基礎を学びます。そして、3年次には、難易度の高い資格試験を目指して国内で勉学を続ける学生以外は、殆どが交換留学生として、自身の目標達成のために、世界中へ羽ばたいて行きます。勿論留学を決めるのは容易ではないと思いますが、私の大学の場合はそこに至るまでの自然な流れができておりました。GCPでは、1年次修了時に給付型奨学金によるフィリピン研修に参加しました。南北問題をこの眼で確かめる機会となりましたが、カガヤン・デ・オロ市の大学との交流では日本人が失ってしまった美しく力強い瞳や笑顔の輝き、弾けるような生命力が心の奥底に強く焼付



清華大学正門前にて
(2013年2月到着直後)

きました。また、2年次には、経営学部代表メンバー25名の一員としてヨーロッパ研修に参加させて頂き、国連を始めとする6つの国際機関や大学を訪問しました。一流の講師陣による講義を受講した後、「人間主義経営」について英語でプレゼンテーションを行い、高い賛同を得ることができました。

清華大学留学前に、GCP生としての目標であったTOEIC920点を達成することはできませんでしたが、北京語に関しては、大学入学後、独学で小学校4年生のレベルからHSK6級レベルまで引き上げることができ、大学の交換留学試験に臨みました。私の留学の目的は、まず世界最高水準の経営学を学ぶことで、清華大学は中国の大学の経営学部では、最高峰の大学でした。そして、二つ目はHSK6級を取得したといっても北京語で大学レベルの論文を書いた経験もなく、また台湾の繁体字と中国の簡体字との差、発音や表現の違いを学び、北京語力をより強めたいという思いがありました。大学の国際課は、北京語の語学力が一番高い学生を交換留学生として清華大学へ派遣したいとの思いがあったそうですが、それらがマッチングして私の交換留学先が決定したのです。中国語圏への留学試験が英語圏への留学試験より時期が早かったために、先に決まった大学へ派遣が決まったという事情もありましたが、英語圏で経営学がトップの大学と私の大学は交流協定を結んでおりませんでしたので、最高の選択をすることができたと思っております。また、大学の国際課に感謝したいことは、適材適所に交換留学先を決めて下さっただけでなく、私自身は決定してから分かったのですが、JASSOの海外留学のための奨学金（給付型）を受給できるように申込み手続きを進めて下さっていたのです。もし、この奨学金制度を利用することができなかつたら、交換留学生としての一年間はなかったかもしれません。関係者の方々には深くお礼を申し上げます。

清華大学での一年間

清華大学は、北京大学に並ぶ中国トップの総合大学で、特に理工系分野の研究に優れた実績を持ち、卒業生には胡錦濤第6代国家主席や、習近平第7代国家主席が名前を連ねています。キャンパスは広大で、敷地面積は東京ドーム約86個分に匹敵します。そのため、教室間の移動には自転車が欠かせません。この広大なキャンパスには400万冊の蔵書を誇る図書館が7つ、食堂も数多く点在しています。校訓は「自強不息、厚德載物」（自らを向上させることを怠らず、人徳を高く保ち物ことを成し遂げる）であり、美しいキャンパスでは世界中から集まった精鋭の留学生との忘れ得ぬ出逢いが幾つもありました。



清華大学校内朝の通学風景
(自転車ラッシュ)

大学の授業

留学前に、HSK6級を取得しておりましたので、現地での生活や授業のスタートに当たり、コミュニ

ケーションで困ることはありませんでした。私は大学の交換留学生としては4期目でしたが、今回初めて語学留学ではなく学部交換留学生として受け入れて頂き、前期セメスターで14単位を取得しました。履修した授業は、留学生向けのスピーキングやリーディング、ライティングの最上級クラス、そして中国概況という地理、歴史、政治、経済等幅広く中国の実情を学べるクラスでした。前期セメスターで留学生向けの最上級クラスの授業を受講しておくことが、後期セメスターで中国人学生と共に授業を受講する際の自信へと繋がると思ったからです。また、私は経済管理学院ではなく、中国語文学系という学部への交換留学生でしたが、8単位分は他学部の授業が履修可能という制度があったため、この制度を利用して興味のあるマーケティングの授業等も積極的に自由聴講させて頂きました。この時、修士や博士課程の優秀な先輩方が、最年少の私を温かく迎えて輪の中に入れて下さったことは忘れがたい楽しい思い出です。このようにスタートの時点から交換留学生としての時間を一瞬たりとも無駄しないという強い思いが、充実した留学生生活を編み出して行く術であったと今になって懐かしく思い出します。

そして、迎えた後期セメスター。私は経営学部の授業以外に、清華大学国際問題研究所副所長劉江永教授の日中関係に関する授業や、プレゼンテーションの授業も含め13単位を取得しました。中国人と華僑の大学院生で構成された高度なレベルの授業では、新商品開発のためのプロジェクトをチームで行いました。その際、文系と理系の思考方法の差異や、国籍による意見の食違い等、様々な困難に直面しました。私は唯一の学部生でしたが、自己主張が強い中国人学生の意見から各々の優れた点をピックアップし共創した結果、10チーム中1位の評価を得ました。そして、これらの経験を通し知的レベルが高い相手であっても対等に接し、考え方の違うメンバーの意見を融合させてより良い方向に向け、結果が出せるという自信を得ました。

北京と上海でのインターンシップ

まず、6月に北京の中国著作権保護センターでインターンシップをさせて頂きました。中国において国レベルの著作権の認証を行うことができる唯一のセンターにおいて、違法動画の取り締まり及び著作権保護に関する業務に携わらせて頂いたことは、良い経験となりました。そして、8月は1か月間、上海秀仕観光会務有限公司という森ビル80%出資の観光施設（上海環球金融中心展望台）の経営管理会社において、企画、ショップ運営、営業、財務、総務に関する業務に携わらせて頂きました。全ての部署での業務に携わらせて頂くことにより、企業の仕組みや各部署の果たす役割を学ぶことができ、将来自分が企業でどのような業務に携わりたいかを熟考するチャンスを得ることができました。私が一番感動したのは、企画部門のコンペで10社の企画案のパワーポイントを拝見させて頂けたことです。今までマーケティングの授業で、ケーススタディーを学ぶ経験しかありませんでしたので、実際に企業のプランディングに触れられたことは、本当に大きな糧となりました。また、8月20日に自分が運

営に携わっていた日本アニメの3D展示会開催が浦東テレビ局で放映されました。そこで、丁度運営に携わっていた関係で、一來場者として私自身のコメントが放映されたことも、楽しい思い出となりました。尚、その展示会が中国著作権保護センターの協力の下で無事開催できたということの後で伺い、改めて6月にインターンシップをさせて頂いたセンターの使命を感じることもできました。

世界遺産巡り

限られた休暇を利用してユネスコ世界遺産巡りをしましたが、四川省への旅行を予定していた時に思わぬハプニングが起きました。チケット予約の前日、四川省で大震災が発生したのです。旅先を急遽変更することになりました。友人7名の国籍は、オーストラリア、タイ、韓国、ドイツ、アメリカ、ウクライナでした。各人が限られた旅費と日程の中で、旅行で果たしたいと思っていた夢があり、私は彼等の要望を聴きながら、中国国内の世界遺産をリストアップし、それぞれの魅力を語りました。そして、全員の意見を取り入れて、対立することなく敦煌、蘭州、寧夏回族自治区等の旅行を企画したのです。チケットやホテルの予約からチャーターするタクシー30台余りとの値引き交渉まで、全て一人で引き受けました。その結果、予定していた世界遺産全てを無事に見学し、全員に満足して頂くことが出来ました。



内モンゴル（モンゴル族民族衣装）

合計15か所の世界遺産を訪ねましたが、一番感動したのは、九寨溝の美しい湖と内モンゴルの広大な草原、そしてプラネタリウムより星の数が多いと感じた満天の星空でした。

帰国後

PM2.5の影響や食生活の変化、学業に対するプレッシャー等が重なり、ストレス性やウイルス性胃腸炎、虫垂炎に罹り入院もしましたが、帰国後は次のステップへ向けて即行動を開始しました。まず、本年3月に参加した「2014年度国際開発ユースフォーラム」では多国籍5名のチームで優勝することができ、その後中国語検定準一級も取得しました。



国際開発ユースフォーラム授賞式

就活に際して思うこと

私の将来の夢は、世界を舞台に活躍できる大手企業に入り、そこで社会貢献できる人材になることです。そして、チャンスがあれば、MBAを取得したいと考えております。

さて、就活に関してですが、清華大学では、大手商社やメーカーから語学留学のために派遣されて来ている社員の方と知り合う機会が多く、様々なお話を伺えたことは大きな収穫となりました。また、北京や上海では大手人材会社主催の日系・外資系企業の合同説明会や選考もあり、私もそれを利用してSPI総合検査を受験した後、面接まで進める予定だったのですが、各業界に対する知識不足や自分自身が本当にその企業の提案する職種とマッチングしているのかという大きな不安感から辞退してしまいました。この外、日本人学生のための企業見学会を開催して下さった大手メーカーもありましたが、実際に働き始めた時の様子が想像できず、結局先へは進めませんでした。大学入学後、就活のための適性検査を受けてはいましたが、現実を目の前に突き付けられた時、それは殆ど役には立たなかったのです。もし、この時親身になって相談に乗って下さる大学のキャリアセンターか日本人学生向けの就活塾があり、改めて業界分析や自己分析ができていたならば、就活の成果が得られたかかもしれません。しかし、私の留学中の最大の目標は勉学であり、実際に授業の予習や復習、膨大な数のレポートやプレゼンテーションを全て熟し、好成績を残すために必死でしたので、何のサポートもなく人生を賭けるに値する企業を見付ける就活を続けるのは困難であったと、今でも思います。尚、帰国後、清華大学で履修した科目は大学側の配慮で全て単位交換できましたので、4年での卒業が不可能だった訳ではありません。ただ、ゼミの担当教授にご相談した結果、ゼミ履修の関係と共に就活にはやはり十分な時間と対策が必要であることが分かり、5年での卒業を選択しました。4年での卒業にこだわるなら、2年次に留学するという選択肢もありますが、その場合日本の大学での経営学の勉学が中途半端なまま出発してしまうことになるので、一長一短と言えるでしょう。「就活に有利だから留学に行く」という学生もいるかと思いますが、それだけの動機では帰国後の就活で上手く行かなかった時の打撃は大きいと思います。実際、留学を経験したからと言って希望している業界に必ずしも行ける訳ではありませんし、先輩方の事例を見ても全員が希望している大手企業への就職を勝ち取れている訳ではありません。

次に、留学前、留学中、留学後で、志望する進路にどのような変化があったかについてお話したいと思います。留学前、私はグローバルに活躍できる日系大手メーカーか商社への就職を希望していました。しかし、留学中に商社マンから伺ったお話は私が想像していたものとは違っていただけで、また外資系の消費財メーカーが世界中に展開している現実を目の当たりにし、外資系企業に魅力を感じるようになりました。そして帰国後、外資系の消費財メーカーでのインターンシップをするため、数社にエントリーしましたが、非常に狭き門であることを実感する結果となりました。また、外資系に応募し続けている内に外資系には日系企業とは性質を異にする厳しさがあることも情報として入って来

るようになり、グローバル展開に注力している企業であれば、日系・外資系問わずインターンシップを試みようと決め、数十社にエントリーしました。その結果、今までに大手メーカーや通信サービス、コンサル等計7社でインターンシップをさせて頂き、自分にマッチングしている企業風土とは、どのようなものなのか少しずつ判断できるようになって来たことを感じています。もし私が留学中に就職活動をしていたら、きっとこのように様々な企業風土を知ることなく、漠然とした不安を抱えたまま限られた選択肢の中で進路を決めていたでしょう。2016年度卒業生から就活の時期が大幅に変更となりますが、これから始まる秋季・冬季インターンシップに挑戦し続けながら、最終的には自分自身の能力を最大限に発揮し、社会貢献できる就職を勝ち取りたいと念願しております。そのために必要なことは、企業から必要とされる人材に自分を磨き上げることであり、専攻分野を深めながら、まずはTOEIC920点以上を取得し、生涯の目標であるトリリンガルに近付けるよう努力し続けたいと思います。

そして、「真の国際人とは地球の裏側で苦しんでいる人に同苦できる人である」という大学の創立者の言葉を忘れずに、清華大学で培った世界トップレベルの優秀な人脈を活かして、国際貢献していきたいと決意しております。



内モンゴル植林ボランティア